

## 47 足部に名前を残す二人のフランス人

—Chopart と Lisfranc

小林 晶

シヨパールとリスフランの名前は世界中のどの解剖学教科書にも記載されている。共に足部の関節に名前を残すフランスの外科医である。骨靱帯学や外傷学では欠かすことが出来ない、二人の生涯と冠名の由来を紹介する。

François CHOPART (一七四三—一七九五) はパリに生まれ初中等教育では常に秀才の誉高く、医学の道を選び十八歳で早くもピティエ病院とビセートル病院のアンテルヌとなった。生来虚弱で激務のあと、悪心、嘔吐に悩まされた。このため常に、体調に気を使っていた。一

七七〇年には、主任外科医となり、「脳損傷の contre-coup」についての研究」が博士論文となった。その後、Hotel-Dieuで有名なドゥッソー教授の薫陶を受ける。

次いでシャリテ病院の主任外科医のかたわら生理学講師となり、一七八九年には病理学教授に就任した。同時にルイ十六世が創立した、医学部付属病院の主任外科医となり、臨床的な活動はここで生涯続くことになる。

一七九一年八月、彼の名が永久に残ることになる記念すべき手術を行った。母趾の潰瘍から中足骨に癌が発生した患者に、足部の部分切断術を行った。踵立方関節 (art. calcaneo-cuboides) と距踵舟関節 (art. talo-calcaneo-navicularis) の離断である。距骨と踵骨を残せば、脚長も不変で荷重に際して便利であろうとの意図があった。

この手術は後年、残存後足部の内反尖足変形が発生し、切断部位としては現今では適当でないとされている。しかし、複雑な構造である後足部関節では、ほぼ直線状に横断するこの関節は冠名表現が便利であり、解剖学や外傷学では世界中で使用されている。

シヨパールは一七九五年六月パリで死去した。彼の最後の言葉は「この世で私は善いことしかしなかった。私のした仕事に反対する声はあがらないであろう」であった。

Jacques LISFRANC (一七九〇—一八四七) はロワール県のサン・ポールで医家に生まれた。初中等教育は最も近いリヨンで受け、医学はパリで学んでいる。一八〇九年サン・ルイ病院のアンテルヌとなり、有名なデュピュイトランに師事した。一八一二年ナポレオン軍に従軍、Bureau Central des Hôpitaux (病院中央局) の外科医となる。尊大な且つ気難しいデュピュイトランとはうまくゆかず、かなり感情の齟齬があった。後年彼の墓前で「私に数々の意地悪をしたこのデュピュイトランは、偉大なもの、美しきもの、金銭しか愛さなかつた」と呟いている。

幸運にもピティエ病院の主任外科医として採用され、精力的な働きをした。教育者としては、方法論の解説がそつてなかつたり、冗談も言わず生真面目一方の講義で未熟だという評価を受けている。

前者と同様、彼の名を永久に残すことになった手術は、前足部の化膿性炎症の患者に対して、一八一五年行われた。解剖学的には足根中足関節 (art. tarsometatarsae) で関節離断術を行い、この関節に名前を冠する

ことになった。これはショパール関節離断と違って、足根関節が温存され創が小さく、義足をつけ易い、多少とも筋肉、腱、靭帯を残すので安定するなどの利点がある。リスフランは述べている。かなり足部に腫脹があつても、この関節は部位のメルクマールがつけ易いことも、大きな特徴と利点となっている。

この手術も後に内反尖足変形を来たし易く、現代では切断あるいは離断部位としては採用されない。しかし、ショパール関節よりも横に直線状を呈する関節で、解剖学や外傷学では普遍的にリスフラン関節と表現され使用されている。リスフランは、フランス外科学会をリードし、多くの業績を残した。一八四七年五月敗血症で死去している。モンパルナス墓地にある彼の墓碑銘は「外科が手術で光り輝くとすれば、血を流さず、損傷を与えず、治癒が得られるときである」とある。

(福岡整形外科病院)